

慰霊というコメモレーションと当事者の 語りのあいだ

開拓団の逃避行の記憶をめぐって

坂 部 晶 子

1. 「逃避行」の語り
2. 入植と引揚げの経緯
3. 慰霊というコメモレーション
4. 記念誌にみる体験の記述
5. 個別の記憶の語り口

1. 「逃避行」の語り

「満洲国」へわたった日本人のうち、国策にもとづき農業移民団として渡満した人びとは27万人ほどであり、「満洲移民」と呼ばれている。農村部への開拓団の派遣は、主に「満洲国」が成立した1932年以降のことであり、なかでも1936年前後から送られたものが多く、その実施期間は1945年に日本の支配が破綻するまでのわずか14年のあいだに限られている。開拓団の移住地の多くは、「満洲国」とソ連との国境地帯、抗日武装勢力の拠点付近に設定された。そのことは、彼らに、「満洲」の日本人都市民と異なり、生活の大部分を中国社会に囲まれたかたちでおこなうという事態をもたらした。

このような「満洲」への農業移民にかんする研究には、従来ふたつの方向性があった。ひとつは、開拓団送出の政策立案過程にかんして1970年代にはじまる歴史学研究であり、日本帝国主義史研究の延長線上に位置する。「満洲移民」は日本から「満洲国」への国策移民という形態をとっており、そこでは、両国における送出と受入の制度の錯綜した緊密な連携性が指摘されている¹。このような歴史学における先駆的研究にたいして、1990年代以降には、教育学や社会学の領域から、「満洲移民」を成立させた制度的要因よりも、その当事者たちの「生きられた経験」に着目する調査・研究があらわれる²。ここでの関心は、「民族協和」「王道楽土」といった「満洲国」統治の主要なイデオロギーは、彼ら「満洲移民」にとってどのように作用したのかという当事者自身の視点にたった経験の解釈と、それにたいする実際の民族間関係はどうであったのかという現実との対応といった点におか

れている。たとえば教育史の分野から、「大陸の花嫁」(開拓団員の配偶者として、日本で募集され、開拓生活にかんする訓練をうけたのちに、大陸へと送りだされた若い女性たち)にかんして幅広く聞きとりを行った研究では、彼女たちの渡満の動機として、「大陸の花嫁」個人の意思の問題と、その決断をもたらした経済的、社会的、文化的要因といった社会状況の両者が分析対象とされている³(相庭他 1996)。また近年では、当時の開拓団における民族関係が直接問題化する研究もあらわれ、そこでは開拓団員への聞きとりと資料から、開拓団の営農形態や購買活動に着目して民族関係を再構成し、開拓団の活動は、生業、流通機構、日常生活のうえで、周辺の中国人社会とは断絶されたかたちで形成されていたことが明らかにされている(猪股 2002)。さらに、もともと日本人の入植した土地は、「満洲国」の移民政策のなかでは「未利用地を主として選定する」と規定されていたにもかかわらず、実際には中国人農民の耕作地を強制的に立ち退かせた場所が多かったという報告もなされている(劉 2003)。これらの研究を総合して考えれば、「満洲国」の諸民族平等という政策は、実際に現実化していたとはいいがたい。「満洲国」の統治理念は、日本人移民にたいしては一定程度影響力をもったが、その理念は、現実とはかけ離れていたと考えておくべきであろう。

上記の既存研究による、「満洲開拓」の実態にかんする実証的成果をふまえたうえで、本稿では、開拓民の戦後の「記憶」に焦点をあてる。なぜなら、これまでの実証的研究のなかでは「満洲」移民の生活世界の再現がめざされてはいるものの、彼らの生活世界とその表象様式にたいする戦後の時間的経過とその社会的影響という視点が欠けているからである⁴。「満洲移民」の語りから彼らの経験世界そのものを引き出すのではなく、「記憶」というファクターを挿入するのはそのためである。彼らが「満洲」経験をどのように表象していったのか、その記憶を表象する微細な語り口のなかにこそ、植民地期の経験を当事者たちがどう意味づけてきたのかを明らかにするための入り口があると考ええる。

「満洲移民」の記憶を分析するにさいして、ここではライフ・ヒストリー研究でのモデル・ストーリーの概念を援用したい。モデル・ストーリーとは、個別の経験の語りにたいして、語り手に語彙や説明の仕方を提供したり、また逆に語りの枠組みとして規定的な働きをしたりする、語り手の属するコミュニティの代表的な語りのことである。ライフ・ヒストリー研究やナラティブ研究のなかでは、支配文化がもつ語りの枠組み(マスター・ナラティブ)にたいして、それに反発したり同調したりするコミュニティのなかでの語りのモデルとなるものとされている(桜井 2002、浅野 2001)。開拓民たちの経験談や証言には、このようなモデル・ストーリーが存在していると考えられる⁵。それは、1945年8月の日本敗戦と「満洲国」崩壊にともなう、日本人植民者たちの「逃避行」、難民経験の語りである。日本の植民地であったかつての台湾、朝鮮、南洋、「満洲」といった地域からの「引揚げ」が、日本の敗戦を期に始まった。もちろん、引揚げ経験そのものは、開拓民だけに限られるわけではない。「満洲国」に居住した日本人の敗戦後の帰国すべてを含ん

でいる。しかし、その引揚げのなかでも、最も混乱を極めた経験をもつのは、「満洲」奥地に居住した開拓民であり、奥地からの逃避行であった。これらの被害の物語はもちろん、個々の状況にそくして多様なバリエーションをもつが、ある引揚げ者の語りをその大筋で紹介してみれば、次のような物語である。

「満洲」奥地の開拓村で、1945年8月9日、ソ連軍が侵入してくるから集結せよとの指令が唐突に開拓団に下される。団の男性は、その年の「根こそぎ徴集」で兵役に駆りだされ、残っているのは年配の男性数名と女性、子どもばかりであった。11日晚の電話で翌日昼までに駅に疎開することになり、慌てて10日分の食料と衣類を馬車に積んで、翌早朝、村からいちばん近い鉄道の駅まで向かう。駅には他の開拓団等千数百名がいたが、列車は来ない。翌日最後の引揚げ列車がくるが、乗ることができず、そのまま開拓団へ戻るとどの家もみな家財はなくなっていた。ソ連軍の飛行機の掃射がはじまり、歩いて鉄道幹線の大きな都市へむけて避難することになる。その途中、従来の公道を歩くと、周辺の武装団等から狙われるために、夜中に行軍したり、原始林の山を越えていく。そのようにしても襲撃を受けることもあり、また川が越えられずに、馬車は捨てられ、荷物も大半はなくなってしまう。食料もつき、雨が降るとぬかるむ地面を数百キロ進むのは、健康な者にも困難であり、途中、声をあげてなく子どもを自分の手で殺すもの、川に流すもの、周囲の農家に預けるもの、あるいはそのまま置き去りにせざるをえない母親も多かったのである。怪我や病気の人間は途中に残して、最終的には22日後に、方正にある収容所に入った。多くの人は衣服もほとんどなく、布切れや麻袋を身体に巻きつけていた。収容所についてからも、食料もなく、厳冬期をむかえて多数の餓死者や病死者をだした。自分は、運よく生き残って日本に帰ってこられたのだ⁶。

このような逃避行の語りは、多くの開拓団で不思議なほど類似している。逃げるさいにそれぞれが直面した状況そのものは、各団によって異なるとはいえ、ソ連参戦が当時の開拓民たちにとって突然の出来事であったこと、日本敗戦直前に「根こそぎ徴兵」が行われ、ほとんどのメンバーが女性、子ども、老人であったこと、開拓団の移住地が国境近くにある、関東軍の多くの部隊は南方へ転戦あるいは一歩先に南下していて、開拓団がソ連進軍の楯となっていたことなど、いくつもの条件が重なっているからである。上記のような十数日から数十日の逃避行の様子は、多くの開拓団の記録や個人の語りのなかでみることができるものであり、開拓団の経験にかんするモデル・ストーリーのひとつと考えることができる⁷。「満洲国」が崩壊し、それまでの権力関係が転倒するなかで、日本人たちがそれをどのように経験したのか、さらにその経験をどのように表象しているのかにかんして、「記憶の表象」である点に留意した分析を行ったのは、歴史評論の系譜のなかにみられる。

「引揚げの手記」を分析した成田龍一は以下のように指摘する。

(それまで) 非対称的関係の優位に立つがゆえに意識しないですんだ「日本人」意識を、引揚者たちはさまざまに意識せざるを得ない体験をもつ。多く提供された手記は、本来はトランスナショナルであったはずの体験を、ゴールとしての「日本」を目指す「帰郷」の物語としてナショナルな記述で覆っている。(中略) 自らが体験する「日本人」や「家族」の分裂が、手記という〈事後〉の記述として記す時に、「日本人」と「家族」の物語として書かれてしまったのである(成田 2003:169)。

成田が分析するのは、比較的著名な引揚げ手記であり、かならずしも開拓団の経験とは限らない。引揚げの過程で日本人植民者の多くは、逃避行や収容所生活を経験している。開拓民もその一部と考えられる。ここでいわれている「『日本人』や『家族』の分裂」とは、難民生活をおくるときに日本人内部で生じた対立や不信感によって「日本人」や「家族」という概念の根拠が問われる経験をさすが、このような手記のなかでは、これらの経験は、自らの観念を問い直す契機とはなっておらず、逆にそれらを事後的に修復してしまうという指摘である。このことはより一般的に言えば、日本人の引揚げ経験が、自らの被害体験にのみ収斂し、他者へのまなざしが希薄であるという点ともつながっている。

この指摘のなかに、体験当時とそれが書かれた時点との時間差、および体験が記憶化されるさいの構造性がはらまれている。成田は同じ論文のなかで、引揚げの手記を分析するさいに、出来事の時間、記述の時間、〈いま〉という時間の三つを区別し、歴史事象の分析では、出来事の時間と〈いま〉の時間との関係で考えられてきたが、体験の手記や記憶を分析するさいには、二番目の「記述の時間」という区分をたてる必要性を述べている。たしかに、引揚げ手記の分析では、戦後のある時点で描かれた開拓の記憶を読みとる作業が強調されている。しかし、手記や回想録となった文字資料に依拠した解釈からだけでは、彼らの戦後の生活状況のなかでの、「記憶の語り直し」にまで踏み込むという作業には限界がある。成田の指摘のなかでは、自らの体験と体験の記述とのあいだのずれが示されただけであり、手記が事後的に書かれることによって、なぜ「日本人」や「家族」の分裂が修復されていくのか、その修復のプロセスには注意が払われていないからである。

以下では、このような逃避行の引揚げ体験を共有する開拓団で、その体験はどのように記憶され、戦後どのようなかたちで表されていったのかを分析する。そのために、本稿が分析の焦点とするのは、逃避行の記憶にかんする集合的記憶の位相と個人的記憶の位相との関係である⁸。集合的記憶の分析にかんしては、長野県の開拓団の多くで行われている「慰霊碑」建設というコメモレイションを対象とする⁹。集合的記憶の表現を明示的なかたちでとらえるために、この「慰霊碑」の碑文分析を行う。個人的記憶の問題については、開拓団への参加者の体験記の分析と、インタビュー調査のなかでの過去の記述への言及を

とりあげる。個人的記憶にかんしては、上述の成田の分析などのなかでも、基本的には戦後日本社会の集合表象のなかに還元され、解釈されてきた。しかし個別の記憶の意味内容だけでなく、その記憶の語り口そのものをみていくことで、集合表象には収まりきらない個別の語りの契機が読みとれるのではないだろうか。本稿では、集合的記憶とそこからわずかに距離をとった個人的記憶の両者を検討することで、個別の語り直しの実践を抽出していく。

2. 入植と引揚げの経緯

まず「満洲」への開拓団の入植にいたる経緯と引揚げの状況を、長野県を例に概観しよう。長野県は日本で最も多くの開拓団をだした県であり、『長野県満洲開拓史』（長野県開拓自興会満洲開拓史刊行会 1984）三巻本（総論編・各団編・名簿編）が整理されている。各団編には県下の全開拓団の入植から敗戦、帰国、戦後の生活にいたる経緯が詳述され、名簿編には渡満したすべての団員の姓名や生年月日、生死の事由が網羅されているように、記録を残すことに積極的であった。

「満洲国」への開拓団派遣は、1932年の「満洲国」建国の年からすでに試験的に行われている。1936年には広田弘毅内閣のもとで七大国策のひとつにあげられ、「二十年百万戸送出計画」が発表される。翌年には「満洲」移民事業と農村経済更正運動を結びつけた「分村移民計画」がたてられた¹⁰。移民への参加は、移民個人の意思によるだけではなく、日本国家の政策が、国－県－市町村というラインをとおして反映された結果でもあると考えられる。

長野県からの移民総数は『長野県満洲開拓史』の調査によると、33700余人を数え、全国の開拓移民の12%以上を占めている¹¹。開拓団にはいくつかの種類があるが、長野県のかかわった開拓団は全部で107あり、そのうち分村開拓団、分郷開拓団等、県内の住民を集めて長野県送出の開拓団や義勇隊として編成されたものが半数を占める（表1参照）。分村開拓団等では、村人口の10%を超えているところもあり、当時の長野県人口からみても渡満率はその2.2%を占めている¹²。わずか十数年のあいだに、村によっては人口の一割近くの人びとが、「満洲開拓」へと赴いたことになる。

入植先はかつての「北満」、現在の中国東北地区でいえば、ロシアと国境を接する黒龍江省内の農村部が多い。入植年度は1936年以降が多く、試験期間中に派遣された在郷軍人を中心とした一部の武装移民団を除けば、入植地で実際の耕作にたずさわった期間はわずか数年間であった。前述のように、開拓団とはいっても、まったくの原野の開拓であることは少ないが、多くの開拓団では、現地で生活の基盤を整えるやいなや、日本の敗戦をむかえることになったのである。

次に「満洲」からの引揚げの状況をみると、冒頭の語りにもあったように、敗戦の混乱と越冬期に老人や幼児、女性の犠牲者を多く出したということに特徴がある。引揚げ

表1 長野県にかかわった開拓団の種類と数¹³

	開拓団の種類	開拓団数	計
試験移民時代の開拓団	試験（武装）移民団	6	12
	自由移民と分散・自警移民団	6	
長野県単独開拓団	全県編成開拓団	4	55
	分村移民開拓団	12	
	分郷開拓団	24	
	集合・農工・帰農開拓団	11	
	報国農場	4	
満州開拓青年義勇隊と義勇軍	創設期における義勇開拓団	2	40
	全国混合編成による義勇開拓団	18	
	長野県単独義勇隊開拓団	11	
	訓練途上の義勇隊と義勇軍	9	

のプロセスそのものの開始も遅れ、長期にわたった。逃避行の途上で、ソ連軍や現地住民による襲撃をうけ、数百人の開拓団員のほとんどが自決によって死亡している場合もある。収容所へ入ってから、厳冬期をむかえて発疹チフス等の病気が蔓延し、あるいは食料が手に入らず亡くなった例も多い。記録によれば、長野県内で郷里に無事生還したものは17698名であり、渡満者のうちわずか52.5%であるという。死亡者（ソ連抑留中の死亡も含む）は14939名（44.3%）、行方不明者220名、中国への残留者約884名となっている。

開拓団の経験というとき、「満洲」当時の体験とその実像というレベルで議論されることが多く、開拓団の戦後にまで言及されることは少ない。このような研究のひとつに、前「満洲」移民による戦後再入植のプロセスをおった蘭信三の研究がある（蘭 1994）。開拓団からの引揚者は、一般に親族をたよって母村に帰国している。しかし、元来人口過剰で海外へ移民を送りだしてきた村に、戦後の引揚者、復員者を養う余裕はなく、彼らの多くは、再び村をでて、生活の道を探すことになる。「満洲」移民の戦後日本社会での再出発の道のひとつが、国内再入植であった。長野県においても、この再入植の斡旋が行われた。「満洲」移民の送出団体のひとつに満州移住協会という組織があったが、戦後に改称し、開拓民援護会として、この再入植の推進や引揚者の支援にあたった。しかし、戦後の国内再入植は、条件の過酷な土地や寒冷地が多く、農業経営ではかならずしも成功を収めたとはいいがたい。その後日本社会の構造変動により、離農者や兼業農家が増加していくことになる¹⁴。

3. 慰霊というコメモレイション

戦後の国内再入植や生活のたて直しのプロセスは、個々の村や個人によってそれぞれで

あるが、長野県内で組織された「満洲」開拓団の多くが共有する戦後の作業として、記念碑建設があげられる。資料で確認できる「満洲」開拓団にかんする長野県内の記念碑（慰霊碑）の数は52ある。付表（本稿末）は、資料で確認できる「満洲」開拓団にかんする長野県内の記念碑（慰霊碑）をリストにしたもので、そのもととなった開拓団や、設立主体や設立年、場所をまとめている¹⁵。ここからまずわかるのは、長野県関連の開拓団の半数近くがなんらかの慰霊碑や記念塔を建設していることである。ことに分村開拓団や分郷開拓団など、もともとの地域ネットワークのなかで形成された開拓団では、戦後にほとんどが当該地域に記念碑を建設している。

記念碑をひとつのモニュメントとして考えると、それがどのようなかたちでつくられているかによって、ふたつに分けられる。ひとつは「慰霊碑」であり、これらのモニュメントの多くがそのまま「慰霊碑」と名づけられていることからわかるように、「満洲」でなくなった死者への記念である。ここには、観音像や供養塔といった死者を供養するためのモニュメントも含まれる。この類の記念碑の建設主体には一般開拓団あるいは開拓団を送りだした市町村が多い。もうひとつは「拓魂碑」あるいは「拓友碑」と名づけられた碑であり、「満洲」開拓そのものを記念するもので、開拓を共にした仲間意識にむけられている。こちらのタイプは義勇隊関係に多い¹⁶。ただし、当然のことながらこのふたつは厳密には分けられない。双方とも、「満洲」開拓を共にし犠牲となった仲間へむけられるとも考えられるからである。ここでは両者を含めて「慰霊碑」としてみていきたい。

慰霊碑の碑文には、それぞれの開拓団の入植へいたる経緯、入植生活の破綻と逃避行の惨状が書き込まれている¹⁷。ある出来事の記憶として、個人の体験記や語りという位相のほかに、特定の社会集団や地域で共有される集合的記憶の位相が想定できる。長野県の多くの市町村に今ものこされたこの記念碑は、各開拓団の生存者や村などの組織によって建てられており、それぞれの社会集団の「満洲」経験にかんする解釈や意味づけの一端を示すと考えられよう。記念モニュメントの文章は、当該開拓団の状況や建設経緯によってその表現様式はそれぞれであるが、全体としていえば、開拓団の悲劇を後世に伝える記念とするという目的をもった慰霊碑であり、碑文の文章もある種のパターンをもつ。たとえば以下に、比較的にコンパクトにまとめられている碑文の全文をあげてみよう。

今を去る三十有余年前、国策に従ひ、数多くの人々勇躍満州に渡り、三江省大八浪に泰阜分村を建設したり。しかるに、第二次大戦は日本の無条件降伏といふ悲運に終結し、理想郷建設も中道にして挫折し、開拓民は異境の旷野をさすらひ、内地帰還の望みも空しく、大陸に恨みをのんで不帰の客となる。誠に痛恨の極みなる。されど諸氏の雄魂は燐として青史に消ゆるなし。今ここに碑を建て、永き世の平和を祈り、誄詞を勒して拓魂を万世に伝ふ¹⁸。

これらの記念モニュメントの碑文は、主に三つのパートからなっていると考えられる。第一のパートは、「満洲」への入植の経緯を説明する部分であり、上の例では、第一センテンスがそれにあたる。第二のパートは、それぞれの開拓団が経験した逃避行の惨劇についての記述であり、「しかるに」以下から「青史に消ゆるなし」の三つのセンテンスがそれにあたる。第三のパートは、開拓の記念・犠牲者への追悼・平和の祈念を述べる部分で、上記の例では最終センテンスがそれに相当する。それぞれのモニュメントで、記述の長短や詳細さに違いはあるが、多くの記念碑では類似した文章構成が用いられている。

開拓民たちは、先にみたように、渡満者の半数近くを逃避行やその後の収容所生活で失っている。その悲惨な植民の結末をもたらした状況を説明するのが、第一のパートにあたる入植の経緯・動機づけにかんする記述である。表2は碑文の記述から読みとれる渡満の理由にかんしてまとめたものであるが、碑文があるもののうちでは、その理由を「当時の国策」と関連づけて表現しているものが圧倒的多数である¹⁹。例えば以下のようなものがある。

讀書村は當時国策に燃え新しい村造りを村是として分村計画を樹て大陸進出に踏み切った是が為先遣隊員二十名は昭和十三年七月満州三江省樺川県公心集に開拓の第一歩を印した²⁰

第七次中和鎮信濃村開拓団は、当時の国策の線により、長野県が送出母体となり全県より選出され、昭和十三年満州国濱江省延寿県中和鎮に三百戸集団として入植、以来八年楽土建設と民族協和に精根を傾け、ようやくその基盤を確立した²¹。

表2 渡満入植の理由（総数52）

理 由		碑文の数
国策との関連による渡満	(国策への評価) 肯定あるいは中立的	32
	(国策への評価) 否定	4
その他の理由・理由の記述なし		7
碑文なし		9

日本の国策として「満洲」へわたり、「王道楽土」の建設に邁進した。これら慰霊碑に共通するレトリックのなかには、「満洲国」政府と日本国政府との区別はみられない。たしかに、当時の日本の国策と「満洲国」政府の建国理念とは、日本社会において直接に結びついたものとして喧伝されていた。いっぽうで、「満洲」の都市に居住した日本人市民の回想のなかには、日本政府と「満洲国」政府の政策を区分し、自らを植民地社会の構成員と位置づける表現も存在している²²。しかしここで分析対象とする慰霊碑碑文のなかでは、日本の国策としての移民事業と、「満洲国」の建国理念とは、ともに達成すべき目標として、地続きのものとして位置づけられている。

このことは、慰霊碑碑文の第二のパートである、逃避行の惨状をもたらした事柄の説明にも結びついている。そこでの表現からは、「満洲」での開拓生活は、ソ連軍の侵攻や日本の敗戦という「予期できない」、唐突な出来事によって中断されたと考えられていることが読みとれる。

これら先駆者が 祖国の運命を遥かに想いながら営々として開拓に励み その理想もようやく達せられんとした昭和二十年夏 思わざる祖国の敗戦により血と汗の結晶は一瞬にしてついで去った²³

現地では国境警備と兵站線を確保し、困苦欠乏に耐えながらも、既に王道楽土は目睫の間にあった。然るに戦況は日を追って不利、ついに開拓民さえも戦火の真只中に巻きこまれ、悲惨極まる情景は真に目を伏せ言語に絶するものがあった²⁴。

慰霊碑は、これら逃避行や引揚げのさいに生き残った人びとによって、途上で亡くなった犠牲者たちに向けて建立されたものである。それゆえ碑文のメッセージの中心は、これら犠牲者たちの惨状を伝え、弔うことにおかれている。「団員家族の避難状況思うだに目を覆うに足るものあり。愛しき吾が妻わが子を銃剣にかけ、兄弟相抱きて爆死せる者、更に脱出せんとして敵弾に倒れる者等その数を知らず。(中略)而も周囲の状況我にあらざる祖国日本の弥栄を祈りつつ。六百余名従容としてこの地に自害したのである」(長野県開拓自興会編 2005: 44)というように、それぞれの開拓団がたどった道筋や、当時の状況、犠牲者の数や様子、またときは故人の名が詳細に記述される。ここで注目されるのは、先の引用のなかにもあるように、開拓団の生存者によって行われる慰霊というコメモレイションのなかで、「満洲」の地で亡くなった開拓団の仲間たちの生の代弁が行われていることである。

ベネディクト・アンダーソンが近代文化としてのナショナリズムの分析を無名戦士の墓と碑の記述からはじめているように、近代国家の戦争での死者たちを記念する碑は、国家のために犠牲になった無数の無名の人びとを想起させる装置として機能する。この開拓民たちが戦後に建立した慰霊碑も、そのつたえるメッセージからみると、国民国家の犠牲となった人びとを顕彰するという近代の特徴をそなえたモニュメントとなっていると考えられる。そのなかで、逃避行の犠牲者たちの死は、ときに「従容としてこの地に自害した」という表現で表されるのである。

これらの慰霊碑の特徴は、上述のような典型的表現にたいするノイズを示す碑文を見ることによって、より明らかになるだろう。開拓団の派遣を当時の国策の線上に位置づけるこれらの慰霊碑の枠組みのなかでは、当時の国策そのものにたいする批判的表現や、あるいは当時の行為を反省的にとらえるという視点が、これら碑文全体のなかでは一種の「ノ

イズ」として存在している。再び表2に戻れば、碑文から当時の「国策」や移民事業にたいする否定的評価を与えているものがわずかしかないことがみてとれる²⁵。

私達は日中戦争下に展開された「満州移民」への農民自らの反省を通して日中両民族の共存を培っていくことが残された者の使命と考える²⁶。

悲劇に終わるこのような結果は、根深い日本の侵略史が在り多大な犠牲を強いた事が背景に在る事を正しく理解しなければならない²⁷。

これらの碑文全体のなかでも、「満洲開拓」にたいする批判的言説は、引用箇所の中の下線部（上記引用の下線部は筆者による強調）ほか数か所のみであり、全体としての比重はひじょうにわずかである。慰霊碑建設というコメモレイションのなかでは、このような戦前の開拓政策にたいする批判や反省といった表現は、若干のノイズとしてのみ存在しているのである。

表3は、この記念碑の建設年代を表にしたものである。ここからわかるように、「満洲開拓」の記念碑建設は、戦後すぐから90年代にいたるまで、各年代にわたっているが、それぞれの年代による碑文や記念碑の違いはあまり明らかなではない。もっとも特徴的なことは、1970年代に慰霊碑建設のピークを迎える点であるが、これは、戦友会や「満洲」関連同窓会の設立のピークとも重なりあっている²⁸。この時代は、戦後の混乱期を抜け、生活が安定した時期であり、また日中国交回復といった事態の変化をうけて、当時をふりかえり、過去と向きあうという姿勢があらわれてきたと考えられる。

これらの記念碑は、基本的には、ひとつの開拓団あるいはひとつの村で一か所ずつ建設されており、それぞれのモニュメントは、それゆえ、各開拓団、各村の「満洲開拓」にたいする一種のフォーマルな記念碑と考えられる。戦後日本社会において「満洲開拓」の歴史は忘れられ、注目されることはなかった。このような社会的環境下において、開拓団を

表3 記念碑等建設年代

設立年代	記念碑等の数
1940年代	1
1950年代	10
1960年代	10
1970年代	26
1980年代	3
1990年代	4
不 明	2

送り出した村の歴史において、少なくとも慰霊や記念碑建設というコメモレイションのなかでは、村人を植民地開拓へと動員した戦前のレトリックが依然として踏襲されている。それは、犠牲を課した国家が犠牲を忘却していることにたいする、生存者の側からの一種のプロテストであるともいえるのではないだろうか。

各開拓団、各村における慰霊碑建設が、たんなるナショナリズム装置としての機能と異なる部分があるとすれば、これらの「満洲」開拓の慰霊碑は、それぞれの村や開拓団という当事者によって建設されており、そこでの死者たちは日常的につきあいのあった身近な人びとであるという点である。ここでの慰霊という行為は、顔の見える範囲の人びとを対象としている。阪神淡路大震災のさいの記念碑・慰霊碑といったモニュメントを分析した今井信夫は、「対面的な死」と「非対面的な死」を区分して、ことに近代社会のような「非対面的社会における死」が共同性を構築するためには、『特別な敬意 (particular honor)』が払われ、『特別な死 (particular deaths)』と位置づけられることが必要」(今井 2002 : 89-104) であると述べる。「満洲開拓」の慰霊碑の多くは、たしかに、村の近親者や仲間内という「対面的関係」のなかで建設されている。しかし、その碑文のなかで上記のように開拓団の偉業がたたえられ、その記憶が顕彰されているのは、開拓の犠牲者たちの死に「特別な敬意」をささげるための作業であるといえるかもしれない。「満洲開拓」という国策事業そのものは、日本社会が戦後復興をとげていくなかで次第に忘れられていく。そのような状況下での犠牲者たちの死の語り手は、開拓団の母村に、あるいは生存者たちに限定されていった。このような戦後日本社会の状況そのものが、開拓団犠牲者の死の意味を生存者たちによって代弁させる構造を用意したのである。「満洲開拓」という国策事業にたいする村を主体としたコメモレイションは、当事者のあいだで共有され、さらにまたその死者たちの生を代弁する「満洲」経験のひとつの雛形となっていた。

4. 記念誌にみる体験の記述

開拓団の慰霊碑が、「満洲」開拓の偉業を記念し一種のナショナルな語りへと収束していくことで、死者たちの記憶をとどめ、共有化していく傾向をみてきた。それは、「満洲」開拓にかんする開拓団母村の集合的記憶の一面と考えておくことができるだろう。しかし、すべての開拓民にとって、かつての「満洲」の記憶が同じようなかたちで表出されるわけではない。

ここでは、村における集合的記憶と対比して、個別の経験の記述をおっていくために、長野県下伊那郡泰阜村からの分村開拓団（大八浪泰阜村開拓団）を事例としてとりあげる。3節でとりあげた開拓団の記念碑建立事業は、この泰阜村でも1978年になって行われている。慰霊碑の背面には、600余名の犠牲者の名前が彫りこまれており、毎年追悼式が行われている。大八浪開拓団は、1939年11月、泰阜村の分村開拓団として、当時の「満洲国」三江省樺川県大八浪に入植した。下伊那郡泰阜村の当時の人口は5000余名、窮乏する村の

更正計画として、国策に順応し300戸の移民を計画し、200戸以上の移民を実行した。入植地である樺川県大八浪は、現在の中国黒龍江省樺南県にあり、省都哈爾濱から東へ300キロほどの農村地帯である。最終的な団員数は、近隣市町村からの縁故移民も含めて、1021名にのぼっている。11の部落があり、学校の児童数は200名をこえた（長野県開拓自興会満州開拓史刊行会 1984b：190-201）。日本敗戦時には、近くの駅へ集合しながら避難列車には乗らず、徒歩で哈爾濱へ向けて避難している。当時の開拓団は、若干であるが歩兵銃や機関銃で武装しており、大八浪開拓団も行動をともにした他の開拓団と、襲撃してくる武装団と交戦している。食料もなくなり、徒歩での老爺嶺越えに力尽きたものも多いという。最終的には、哈爾濱から170キロほどの方正県でソ連軍から日本の敗戦を知らされ、武装解除をうけたあと、収容所にはいった。収容所でも越冬期に多くの人が亡くなっている。1000名をこえる団員のうち、150名ほどが出征しており、1974年の記録では、「満洲」での逃避行を経て戦後数年のあいだに帰国したのは、303名、死亡が451名、未帰還と消息不明は、あわせて100名をこえている（長野県開拓自興会満州開拓史刊行会 1984b）。慰霊祭はこれらの犠牲者を悼み、平和を願うための村の行事として定着している²⁹。

記念碑建設と同時に記念誌の編集も行われ、開拓団関係者50数名の体験記を中心とした記録がまとめられた。この手記のなかでは、前節で見たような、開拓団の集合的記憶の語りとはいくぶん異なった個々人の「満洲」経験への位置づけがうかがえる。冒頭の「逃避行」の経験を語ってくれた引揚げ者の女性は、泰阜村からの分村開拓団（大八浪泰阜村開拓団）の一員として、1940年3月、15歳で渡満している。彼女もまた記念誌に手記を寄せており、そこでは「満洲」での日本の敗戦にともなう逃避行の様子が記述されている。なかでも強調されているのは、「満洲」で亡くなった人びとと、そのまま中国に残された人びとにかんする事柄である。

険しい山で道がない。仕方なく手足まといになる子供から捨てなければならなかった。一人捨て、二人捨て、河に捨てる人が多くなっていった。私も七人まで捨てるのを見ていたけれど、止めることも助けることもできなかった。「お母ちゃん、いやだ」と泣く我が子が無我夢中で河に突き落とす。濁流にのまれる如く流れてゆく子を親は放心状態でみていた。ここで子供を捨てなければ自分も死ぬことになる。またとり残されたら死ぬことであった（泰阜分村記念誌編集委員会 1979：299）。

満人たちは、この頃からお米やお金を持って子供や娘や主婦を買いにくる。子供がお母さんにお米のごはんが食べられるし、暖かい満人の家に行こうと、子供に引かされて、このまま死ぬか、満人の家に行くか、二つに一つしか道はない。生きていれば日本へ帰れるかも知れないと思って考えた人は、満人の家へ子供や娘を犠牲にして行く人もいた。又自分が主婦になって行く人様になであった（泰阜分村記念誌編集委員会

1979 : 301)。

引用は、逃避行や収容所での生活のなか、自らの子どもを犠牲としたり、自らが子どもや家族の犠牲となって中国の家庭へ入っていったりした事例の記述である。慰霊碑の碑文においては、「満洲」で亡くなった人びとについて、その当該母村が、あるいは開拓団の生き残りの人びとが代弁するという構造が見られる。なおかつ、そのような状況を招来した当時の国策にたいする批判的言明はひじょうに稀であった。しかし、ここでの記述は、個人的な見聞という形態をとりながら、「従容として自害した」というような集合的記憶に相反する状況を報告している。

彼女が自らを託しているのは、自分と同世代の女性たちである。開拓団の犠牲者は、戦後復興のただなかにある日本社会のなかでは忘れられるか、あるいは村においては開拓の尊い犠牲者として祀られてきた。そこでは、亡くなって祀られた人たちとは異なり、家族の犠牲となって中国の家庭へ入った女性たちの存在は見えないものとなってしまっているのではないか。ここで、書き手は、このような犠牲者像にたいして、一種の異議申し立てを行っているのである。

この文章の書き手である女性は、前述のように、家族とともに15歳で渡満し、20歳のとき敗戦をむかえ、翌年日本に帰国している。彼女は2005年の現在80歳であり、開拓団時代の話を知りたいといって自宅を訪れたわたしに、冒頭にあった逃避行の経験談を、一気呵成に話してくれた。それは、「満洲」から日本へ帰国してからの半世紀以上の年月のあいだ、いくども話してきたものと推察された。事実、彼女は各所で頼まれれば、たとえば村の中学生が海外研修で中国へ行くときに、かつての開拓団の体験を話しにいく、語り部としての役割も果たしている。

彼女のライフ・ヒストリーは、「満洲開拓」の村の歴史によりそっている。彼女は入植後、哈爾濱で看護婦の勉強をし、団の看護婦として働いていた。父が徴兵されると、母と妹たちと一緒に逃避行をおこなっている。その後日本の敗戦を知り、母と妹たちは、父の帰りを待つために、方正の収容所から開拓団のあった場所へ帰っていく。彼女はその後ひとりで収容所から哈爾濱まで移動し、発疹チブスで死にかけたり、また哈爾濱から長春まで線路を徒歩で移動する兵隊に混じって歩きとおして、1946年8月日本へ帰国した。故郷の泰阜村へ戻ったときもひとりきりであった。

彼女の父は1948年にシベリアから引揚げているが、「満洲」で別れた母と妹の消息がつかめたのは1950年である。「満洲」からの引揚事業は、1949年の中華人民共和国成立頃から一時中断する。のち、1953年から数年間、後期集団引揚が実施されたが、日中の国家レベルでの帰国事業の提携が順調に進まなくなり、再び中断されることとなる。その後、中国東北に残された日本人の帰国が実質的に可能となるには、1972年の日中国交正常化を待たなければならなかった³⁰。彼女の母と妹ひとりとは、彼女よりも七年遅れて、1953年の後

期引揚げで帰国してきた。彼女のもうひとりの妹は15歳のとき現地で結婚し、引揚げまでのあいだに亡くなっている。

開拓民の一員として中国に残された女性の多くは、彼女の姉妹であり、友人であり、村の知りあいであった。彼女と同じように、家族が長期間帰国できなかった人びと、またその途中で亡くなった家庭が、村には幾家族も残されていた。その意味で、泰阜村の開拓民にとって「満洲」開拓というひとつの歴史的プロセスは、敗戦、引揚げ、復興という日本社会の戦後プロセスと同じに進んだわけではなかった。戦後30年近くたって初めて日本へ帰国してきた女性たちも多く、彼女たちやその家族にとって「満洲」開拓というひとつの歴史は、まだ完了してはいなかったのである。

先述の記念誌の文章は、このような女性たちの存在について強く言及するかたちとなっている。彼女たちの存在をうちだすためには、自己意思による残留ではないということが強調される必要があった。なぜなら、日本政府は帰国事業が中断している期間に、引揚者にたいする戦後処理を終了させ、「満洲」に残った女性にたいしては、残ることを自ら選択したのだという解釈をとり、未帰還者の援護対象からはずす方針をとったからだ³¹。ここで書き手が試みているのは、日本政府と戦後社会から切り捨てられてきた残留日本人たちの存在を、もういちど彼女の経験した開拓団の歴史のなかに織り込んでいくことであった。このような書き手の行為を動機づけているのは、彼女のなかに存在する、家族の犠牲となった女性たちにたいする、時代の同行者としての共感であろう。

しかし、いっぽうで、ここでの記述は、家族の犠牲となった女性を自らの同行者として包含していくために、排除されている部分があることを見落とすわけにはいかない。中国に「余儀なく残された」あるいは「中国人へ売られた」という表現には、それが意図する表現であるか否かを問わず、日本人と中国人という線引きを前景化してしまう力がある。「売られた女」という言葉は、中国残留日本人婦人が、日本帰国後にときおり用いる自己規定の表現でもある³²。このことからうかがわれるのは、戦後日本社会が「日本人として中国社会に残された」彼女たちの存在をうけいれるために、民族的な枠組みのレトリックを必要としていたということである。

5. 個別の記憶の語り口

彼女の引揚げの語りはどのように形成されてきたのだろうか。それを、「満洲」開拓にかかわる戦後の経緯を追いかけてながら、彼女が現在のように語り部として多くの人に体験を伝える役目を果たすようになった過程のなかにみておきたい。

はじめに、帰国直後の状況報告者としての役割がある。泰阜村からの開拓民のなかで、最もはやく村へ戻ってきたのが、彼女であったのだという。彼女は帰国後、「満洲」での状況を村の人びとへと伝える役目をおった。村の人口の二割近い人々が渡満していた。日本には多くの家族や親族が残されている。彼らにたいして彼女は当時の状況を伝える義務

を負ったといえる。村の南北の小学校体育館で説明会が開かれ、渡満者の家族たちに当時の状況や団員の安否を説明したという。

時間が経つにつれて、次第に開拓団のメンバーであった他の生き残りの人びとも帰国してきた。しかし、彼らにとって、「満洲」からの引揚げは簡単には終わらなかった。先ほども述べたように、団員のうちで戦後すぐに帰国できたものは半数にもみえない。生死が不明のものも多い。彼女もまた母や妹の消息を求めて、中国とのあいだで手紙のやりとりをしている。敗戦後10年以上かかって、数度の集団帰国が実施されている。

敗戦後30年以上すぎた日中国交正常化以降、さきの集団帰国で帰れなかった人びとが、里帰りをしたり、身元確認をおこなうことが可能となる。「中国残留婦人」の境遇にたいする彼女の記述は、このころから増加していく「残留婦人」の帰国や里帰りと軌を一にしている。彼女は、この時期から幾人もの帰国者たちの身元を引き受け、帰国後の生活の面倒をみている。ここで彼女は、中国から帰ってきたばかりの「残留婦人」たちを村や日本社会へ説明する役割を担っていた。

そして戦後60年がすぎた現在でも、中国残留者たちの親族の日本への定住、帰国という状況は続いている。また、泰阜村では、中学生が中国東北へ出かける海外研修が行われている。訪問先には、大八浪泰阜村開拓団の人びとが収容され、たくさんの残留者をだした黒龍江省方正県も含まれている。この海外研修のさいにも、彼女は、現在の中学生たちにたいして、村の半世紀前の歴史を話しにいく講演者であった。

植民地「満洲」での開拓団の惨事は、その植民地の宗主国であった日本社会とは切り離され、忘却されていく。自分が経験した逃避行の語りは、その状況を限られた時間のなかで人びとに伝達するために整序されていった、「満洲」経験のエッセンスとなっている。逃避行のさいに、病人を山中に置き去りにしたことや、子どもを殺してきたといった出来事もまた、このような逃避行の悲劇性を伝えるための重要なエピソードとしてその語りのなかに織り込まれている。しかし、このような子どもや病人を見殺しにしたというような、ある種自分の加害性にも言及するような出来事は、実際には、簡単には口に出せるものではなかった。帰国当時の報告会で、亡くなった団員の親族に、このような出来事が伝えられたのかどうかと尋ねたわたしの問いに、彼女は以下のように答えている。

ふふふ。それ言えなかったよ。村長さんに聞かれてもね。んんん、それはね、子ども河に捨てたとか、兵隊さんに殺してもらったとか、そういうことだけは、あんまりはっきり言えなかったね①。そして、その当時は中国の人と結婚した、結婚するってことあんまり言えない時代だったの②。だからね、その人たちは何をしているって聞かれたの、村長さんに。何をしてるか、わたし、分からないって言ったの。たぶん、その、中国の人の家で働いてると思うって。わたしは見たわけじゃないから、ただ馬車に乗って、連れられてったって。ほら収容所じゃ、こんなところだったって、着る物

もないでしょ。布団もないし。そいで窓もないんだよ③。こんな窓なかったの。そいで凍り死んじゃうでね。わたしは百円もってたので、(中略)穴を掘ってもらって、穴倉生活をしたの。八ヶ月。そいで三月の終わりから四月んなって、少し暖かくなってきたもんで哈爾濱へ南下していったの。だからほんとあんときは、んん、自分も死ぬと思ったね④³³。

ここでは、いくつかのことが言われている。第一には、逃避行の最中に多くの開拓民仲間を見殺しにしてきたこと、それをその家族に伝えることの困難であり(下線部①)、第二には、一つ目に続けてすぐ、中国人と結婚した、中国の家庭に入ったということを村へ伝えることの困難である。彼女自身、中国への残留者を語るさいに、民族的な排除の枠組みが機能していること、またそれに従って表現をおこなっていることに自覚的なのである。そのあとに続けて、収容所における生活環境、生存自体の困難さの語り(下線部③④)がくるのは、そのエクスキューズのためではないだろうか。

日本社会が戦後復興をとげるなかで、「満洲」への開拓団送出という事実自体が急速に忘れられていった。泰阜村においても、現在の若い人びとのあいだでは、そういうことがあったことは聞いてはいても、具体的な状況など知る由もない。彼女が語り継いでいる「満洲」での逃避行の様子は、もちろん、このような事実を伝達することがその当初の目的ではあるが、いっばうで逃避行の経験そのものが、彼女自身の語りを支える帰着点としても機能しているのである。

ここでは、「満洲」農村部への日本人開拓団の記憶のかたちを、長野県の開拓団の慰霊碑の分析と、当事者自身の語りからみてきた。農村への移民は、「満洲」の諸都市の生活者と違って、植民地のより深部へ入り込んでいった。「満洲国」時代に開拓団内部で生活しているときは、日本社会が形成され、周囲とは切り離された空間が成立していたといえるかもしれない。けれども、開拓団の慰霊碑に刻まれた碑文といった、制度的に整合化された記述のなかに、植民された中国社会への視点を見つけだすことは、若干の例外をのぞけば難しいのである。

しかし、本稿でとりあげてきたある種ステレオタイプともいえる開拓民の逃避行の語りの語られ方そのもの、さらには、逃避行のモデル・ストーリーへのメタ・レベルでの言及のなかには、彼ら自身が自らの経験をどう解釈しているのかにかんする糸口を見つけだすことができる。日本の敗戦と「満洲国」の崩壊は、彼らに大きな秩序転換を強いるものであった。それと同時に、戦後長期間にわたって、親族や開拓団の仲間を探し出すさいの現中国東北の人びとの交渉ややりとりのプロセスをとおして、新たな中国社会へのまなざしが生まれていると考えられよう。たとえばそれは、上述の引用下線部②に見られるような、かつての日本社会のなかには中国人との婚姻への忌避感があったことへの「気づき」という、メタ・レベルでの語り口をとおしてである。ここからわかるのは、植民者としての

アイデンティティが新たな枠組みへと転換されるとき微妙な筋道であった。

植民地社会の崩壊という事態は、そこでの支配者 被支配者という構造的な立場性の転換をもたらすものであった。けれども、戦後日本社会においては、この立場性の転換にともなう、認識枠組みの転換が直接的に表出されてきたわけではない。そのことは、戦後にわたってつくられてきた慰霊碑碑文の記述のなかでも明らかである。しかし、本稿の最後で確認したように、当事者たちの個別の経験の語りのなかには、自己のかつての語りへのメタ・レベルでの言及をとおして、認識転換が示されることもありうる。そこには、集合的記憶としての慰霊碑碑文と個人的記憶としての当事者の語りとのあいだの落差があらわれているのである。

注

- 1) 代表的な研究として、『日本帝国主義下の満州移民』（満州移民史研究会 1976）がある。
- 2) たとえば蘭（1994）、相庭他（1996）など。
- 3) ただし、ここで女性個人に作用した当時の社会的要因としてとりあげられているのは、「女でもお国のためにお役に立てる」という日本社会にたいする愛国心や使命感が中心であり、「満洲国」のイデオロギーそのものに直結しているわけではない。
- 4) 本稿の投稿後に、山本有造編『満洲 記憶と歴史』（2007）が出版されている。本書は、京都大学人文科学研究所・共同研究報告書であるが、ここでは「記憶からみた満洲」がはじめてとりあげられている。本共同研究には筆者自身も参加し、本稿の構想にあたって大きな啓発をうけた。
- 5) 開拓民個人がのちに記した記録、回想録は自費出版等が多く、その全体を把握することは難しいが、「満洲移民」にとってその経験が、「満洲国」における秩序崩壊後の逃避行や難民体験として語られることが多いということは、これまでしばしば指摘されてきた。「満洲移民」や「引揚げ」を直接分析した研究のなかであげれば、蘭信三は、「満洲移民」への聞きとり分析をつうじて、その体験の中核に「敗戦後の満洲体験」があるとし、「満洲国」崩壊後の逃避行と難民としての経験を「今なお鮮明に記憶されるほど重いもの」であるという（蘭 1994：146-147）。また成田龍一は、引揚げの手記を分析して、「戦時と戦後を挟み込む体験として綴られ、体験の苦労に照準が当てられるものが多い」としている（成田 2003：151）。ここではこのような語り類型を、逃避行のモデル・ストーリーと呼んでおく。
- 6) ここでモデル・ストーリーとして抽出した語りは、長野県下伊那郡泰阜村での聞きとり調査から再構成したものである。
- 7) 長野県内のすべての開拓団の顛末をまとめた『長野県満州開拓史 各団編』（長野県開拓自興会満州開拓史刊行会 1984）のなかにも、それぞれの開拓団の「逃避行」の様子が記されている。
- 8) ここでは、記憶にかんするふたつの位相を理論的に区別しておく。第一は個人的な記憶であり、第二は集合的な記憶である。記憶は個人的な経験世界の痕跡というだけでなく、さまざまな経験世界が個人のなかで記憶化されるさいにも、さらにそれが社会にむけて表象されるさいにも、社会的・集合的な言説世界のフィルターを経由する。その意味で記憶は集合的・社会的なものでもある（アルヴァックス 1989）。
- 9) 「満洲移民」の逃避行の経験のような共同経験にかんして、先に見てきたように、モデル・ス

トリー存在や一種の集合的記憶の共有が想定される。長野県からの開拓団の経験にかんしては、戦後に広く記念碑建設が行われており、そのコメモレイションのプロセスにおいて、地域の集合的記憶の一端が表出されている。コメモレイションとは、ある歴史的出来事を記念・顕彰する行為をさすが、ここでの記念碑建設というコメモレイション事業のなかでは、以下の点に着目していきたい。ひとつには、歴史事象にたいするコメモレイションにおいては、記念されるべき事象の注意深い選択と位置づけが行われているという点である。そこには、何が抽出されるべきで、何が不要なのかという歴史事象の政治的・社会的な選択が働いている。もうひとつは、このようなコメモレイションの対象は、地域の集合的アイデンティティの一端を示すという点である。このような点に留意することで、記念碑建設というコメモレイション事業を、国民国家のナショナルな物語の媒体としての側面と、また同時に地域的な記憶の媒体としての側面との結節点として読みとることが可能となる(坂部 2004a)。

- 10) 「満洲」移民事業の政策立案過程については満州移民史研究会(1976)の分析、「満洲」移民事業の具体的展開については、蘭(1994)の分析が詳しい。
- 11) 以下、長野県開拓団にかんする数字は、『長野県満洲開拓史』(長野県開拓自興会満洲開拓史刊行会 1984)による。
- 12) たとえば下伊那郡の1935年当時の町村人口にたいする渡満比率をみると、上久堅村(現飯田市内)18.9%、清内路村18.9%、泰阜村13.4%、川路村(現飯田市内)13.1%、千代村(現飯田市内)10.8%など(齋藤 2003)となっている。
- 13) 表内の開拓団の種別は、『長野県満洲開拓史』(長野県開拓自興会満洲開拓史刊行会 1984)による。
- 14) 開拓民の戦後の状況についての記録としては、たとえば、長野県開拓自興会満洲開拓史刊行会(1984a)や小林(1977)など。
- 15) 本稿の付表は、『長野県満洲開拓史 各団編』(長野県開拓自興会満洲開拓史刊行会 1984)、『長野県満洲開拓の碑 記録と写真』(長野県開拓自興会 2005)より作成したもので、長野県や県内の市町村を母体として送出された開拓団の入植年度や入植地、在籍者数、帰国者数、および慰霊碑建立年代、慰霊碑銘等をリスト化したものである。
- 16) 表2参照。義勇隊は、国民学校を卒業したばかりの15、6歳の少年を含めた若者に訓練をうけさせ、開拓団として編成したもので、同世代のものを中心とした横のつながりが強いと考えられる。また義勇隊では、敗戦時に応召されていたものも多く、他の一般開拓団と比べたときに、敗戦後の経験が若干異なる。「満洲」からの引揚者では、兵隊から復員した者のほうが、一般開拓民として逃避行を経た者よりも、相対的にはあるが生存率が高い。
- 17) それぞれの記念碑・モニュメントに記された文章を碑文と読んでおく。ここでとりあげる碑文は、原則として『長野県満洲開拓の碑 記録と写真』(長野県開拓自興会 2005)によっている。
- 18) 満洲大八浪開拓団慰霊碑碑文(長野県開拓自興会編 2005:26)。
- 19) 「その他の理由」として表現される場合も、「縁故移住として」といった別の経緯の説明があるだけで、基本的には国策としての派遣という文脈から外れるわけではない。
- 20) 第八次公心集読書村開拓団拓魂碑碑文(長野県開拓自興会編 2005:28)。
- 21) 第七次中和鎮信濃村開拓団の慰霊碑碑文(長野県開拓自興会編 2005:15)。
- 22) このような回想については、拙稿(坂部 2000)を参照。

- 23) 高森町満蒙開拓殉難者慰霊碑碑文（長野県開拓自興会編 2005：40）。
- 24) 更埴満州開拓殉難塔の碑文（長野県開拓自興会編 2005：48）。
- 25) 本稿で「国策にたいして否定的」と解釈した碑文は、以下の本文引用事例以外にふたつ（全部で四つ）である。ひとつは、「日中友好不再戦の碑」と題された阿智村長岳寺にある碑であり、もうひとつは「拓友之碑」と題された檜川村にある碑である。特に長岳寺の碑は慰霊碑や拓友碑とちがって、直接的に日中友好不再戦をうたっていることから分かるように、多くの「満洲開拓」関連の碑のなかで特異な性格をもっている。阿智村長岳寺の住職、山本慈照氏は、自身の家族を開拓団で失い、戦後早くから「残留孤児」たちの引揚げ支援活動をおこなった人物として知られている。
- 26) 水曲柳開拓団殉難犠牲者慰霊之碑碑文（長野県開拓自興会編 2005：8）。
- 27) 東筑摩開拓団殉難碑碑文（長野県開拓自興会編 2005：69）。
- 28) 戦友会や「満洲」関連同窓会の設立ピークは、昭和20年代と40年代（とくに後半）にある。昭和20年代は、戦後帰国してすぐの集まりであるが、昭和40年代、あるいは1970年代のピークは、戦後の混乱期を抜けて、生活が安定した時期にあたると考えられる。
- 29) 現在でも毎年10月18日に、戦没者と満洲開拓犠牲者の追悼式が、泰阜村の主催で行われている。
- 30) 「満洲」からの日本人引揚げの経緯と国家関係のなかでの交渉過程や、その政治・社会的過程が、残留日本人の生にどのように作用したのかといった点にかんしては、『中国帰国者』の歴史的形質に関する一考察 「中国残留日本人」の残留と帰国をめぐる（南 2003）が詳しい。
- 31) 1959年「未帰還者に関する特別措置法」が公布された。同法によって、生死の分からない未帰還者の多くにたいして戦時死亡宣告が行われることになり、また消息はつかめたとしても、中国残留の意思表示ができないまま、多くの女性が「自己意思残留者」として認定された（南 2003：134-135）。これらの経緯にかんしても、注30と同様、本稿では、南の研究に多くを負っている。
- 32) たとえば拙稿（坂部 2004b）参照。
- 33) 2005年10月、泰阜村にある自宅におけるインタビューの記録から。

参 考 文 献

- 相庭和彦・大森直樹・陳錦・中島純・宮田幸枝・渡邊洋子、1996、『満洲「大陸の花嫁」はどうつくられたか 戦時期教育史の空白にせまる』、明石書店。
- アンダーソン、ベネディクト（白石隆・白石さや訳）、[1983] 1987、『想像の共同体 ナショナルリズムの起原と流行』、リプロボート。
- 蘭信三、1994、『「満州移民」の歴史社会学』、行路社。
- （編）、2003、『「中国帰国者」の社会的適応と共生に関する総合的研究 「中国帰国者」は国民国家を超えるか』、平成12年度～平成15年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果中間報告書（課題番号13410048）。
- アルヴァックス、M（小関藤一郎訳）、[1950] 1989、『集合的記憶』、行路社。
- 浅野智彦、2001、『自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ』、勁草書房。
- 古久保さくら、1999、「満洲における日本人女性の経験 犠牲者性の構築」、『女性史学』9号、1-14頁。
- 今井信夫、2002、「阪神大震災の「記憶」に関する社会学的考察 被災地につくられたモニュメ

- ントを事例として」、『ソシオロジ』145号、89-104頁。
- 猪股祐介、2002、「『満州移民』の植民地経験 岐阜県郡上村開拓団を事例として」、『関連社会科学』第12号、2-20頁。
- 小林弘二、1977、『満州移民の村 信州泰阜村の昭和史』、筑摩書房。
- 満州移民史研究会(編)、1976、『日本帝国主義下の満州移民』、龍溪書房。
- 南誠、2003、「『中国帰国者』の歴史的形成に関する一考察 「中国残留日本人」の残留と帰国をめぐる」、蘭信三(編)、『『中国帰国者』の社会的適応と共生に関する総合的研究』(平成12年度～15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果中間報告書、課題番号:13410048)、85-161頁。
- 長野県開拓自興会(編)、2005、『長野県満州開拓の碑 記録と写真』、長野県開拓自興会。
- 長野県開拓自興会満州開拓史刊行会、1984a、『長野県満州開拓史 総論編』、長野県開拓自興会満州開拓史刊行会。
- 、1984b、『長野県満州開拓史 各団編』、長野県開拓自興会満州開拓史刊行会。
- 、1984c、『長野県満州開拓史 名簿編』、長野県開拓自興会満州開拓史刊行会。
- 中繁彦、2004、『沈まぬ夕陽 満蒙開拓の今を生きる中島多鶴』、信濃毎日新聞社。
- 中島多鶴・NHK取材班、1991、『忘れられた女たち 中国残留婦人の昭和』、日本放送出版協会。
- 成田龍一、2003、『『引揚げ』に関する序章』、『思想』955号、149-174頁。
- 劉含発、2001、「満州移民の入植による現地中国農民の強制移住」、『現代社会文化研究』21号、361-378頁。
- 、2003、「日本人満州移民用地の獲得と現地中国人の強制移住」、『アジア経済』第44巻4号、20-49頁。
- 齋藤俊江、2003、「下伊那地域における満州移民の送出過程」、『飯田市歴史研究所年報』第1号、81-98頁。
- 坂部晶子、2000、「植民地の記憶の社会学」、『ソシオロジ』137号、109-125頁。
- 、2004a、「中国東北地区における『満洲』にかんする記憶の表象 コメモレイション施設の展示をとおして」、『ソシオロジ』150号、73-90頁。
- 、2004b、「歴史と国のはざまから 『中国残留日本人』の帰国以後」、『月刊みんぱく』5月号、10-11頁。
- 桜井厚、2002、『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』、せりか書房。
- 高橋三郎(編著)、1983、『共同研究 戦友会』、田畑書店。
- 山本有造(編)、2007、『満洲 記憶と歴史』、京都大学学術出版会。
- 泰阜分村記念誌編集委員会(編)、1979、『満州泰阜 後世に伝う血涙の記録』、泰阜分村記念誌編集委員会。

キーワード 満洲 開拓団 コメモレイション 慰霊碑 長野県 泰阜村 モデル・ストーリー

(SAKABE Shoko)

付表 長野県内「満洲」開拓団の慰霊碑リスト

番号	開拓団名	種類	主な送出母体／ 入植年度	入 植 地	終戦時在籍者 数(出征数)	帰国者数 (復員者数)	慰霊碑建立主体	建立年代	建 設 地	慰霊碑等の碑銘
1	第一次弥栄村開拓団	試験移 民	県下全域／1932年	吉林省樺川県永豊鎮	173 (23)	109 (23)	長野弥栄会	1970年 8 月	南安曇郡高町豊里	「殉国」
2	水曲柳開拓団	自由移 民	飯田・下伊那及び北 海通／1937年	吉林省舒蘭県水曲柳	1079 (99)	736 (78)		1994年	飯田市	「水曲柳開拓団殉難犠牲者慰 霊之碑」
3	第五次黒台信濃村 開拓団	全県開	長野県各地／1936年	東安省密山県王家砦鍋 塔頭湖甲	1564 (229)	450 (173)	黒台信濃村同志会	1972年10月29日	善光寺雲上殿境内	「慰霊之碑」
4	第六次南五道崗長 野村開拓団	全県開	長野県各地／1937年	東安省密山県南五道崗	1343 (212)	461 (129)	長野村同志・同窓会 河野地区連族	1975年 4 月29日 1974年 8 月16日	善光寺雲上殿境内 下伊那郡豊丘村河野泉竜院境 内	「慰霊碑」 満洲開拓観音像
5	第七次中和鎮信濃 村開拓団	全県開	長野県各地／1938年	浜江省延慶県中和鎮	1154 (153)	468 (117)	中和鎮信濃村同志会	1975年 3 月 8 日	長野県各地／善光寺雲上殿西 より花園霊園	「慰霊碑」
6	第七次四家房大日 向村開拓団	分村開	南佐久郡大日向村／ 1937年	吉林省舒蘭県四家房	786 (64)	395 (52)	大日向開拓団同志会	1964年11月 3 日	北佐久郡峰井沢町大日向大日 向公民館庭内	「開拓之礎」
7	第八次富士見分村 王家屯開拓団	分村開	諏訪郡富士見村／ 1939年	浜江省木蘭県王家屯	895 (122)	680 (97)	富士見町拓友協会／ 開拓団関係者一同 富士見分村拓友会・ 上久堅開拓団同窓会 在満国民学校同窓会	1954年 8 月 3 日 1968年12月 1978年 8 月	富士見町南原山 富士見保育園北側高台 富士見町南原山	満洲開拓殉難者供養塔 「拓魂」 地蔵尊像
8	第八次老石房川路 村開拓団	分村開	下伊那郡川路村他／ 1939年	浜江省木蘭県老石房	524 (97)	391 (78)	川路自治協議会	1972年	飯田市川路川路神社	「惟拓魂」
9	第八次大八浪泰阜 村開拓団	分村開	下伊那郡泰阜村／ 1939年	三江省樺川県大八浪	1021 (160)	412 (109)	村民並びに生存者一 同	1978年 3 月18日	泰阜村平島田平和宮の脇	「満洲大八浪開拓団慰霊碑」
10	第八次公心集読書 村開拓団	分村開	西筑摩郡読書村他／ 1939年	三江省樺川県公心集	715 (103)	243 (73)	読書村自興会	1959年 8 月15日	南木曾町読書	「拓魂碑」
11	第八次霞丹岡千代 村開拓団	分村開	下伊那郡千代村／ 1939年	三江省湯原県霞丹岡	446 (70)	266 (54)	千代地区満洲慰霊碑 建立委員会	1976年10月11日	飯田市千代米川の八幡神社	「満洲開拓慰霊碑」
12	第八次新立地上久 堅村開拓団	分村開	下伊那郡上久堅村／ 1939年	三江省通河県新立屯	789 (109)	220 (92)	上久堅開拓団拓友一 同	1973年 9 月23日	飯田市上久堅神之峰	「満洲開拓碑」
13	第十三次蘭花樺川 村開拓団	分村開	西筑摩郡樺川村／ 1944年	浜江省木蘭県蘭花	185 (20)	116 (13)	蘭花会	1974年10月	樺川村役場前諏訪神社境内	「拓友之碑」
14	第十四次推峯御嶽 郷開拓団	分村開	西筑摩郡三岳村／ 1945年	三江省樺川県田録村大 推峯	30 (20)	18 (14)	推峯御嶽郷	1957年 4 月28日	三岳村大泉寺	「慰霊碑」
15	第八次小古洞夢科 郷開拓団	分郷開	北佐久郡／1939年	三江省通河県清河鎮小 古洞	557 (105)	195 (80)				
15	第十次三台子小諸 郷開拓団	分郷開	北佐久郡小諸町／ 1941年	奉天省康平県三台子	245 (34)	201 (27)	北佐久郡町村会	1958年10月21日	北佐久郡岩村田町上ノ城	「満洲開拓団慰霊碑」
16			下伊那郡高森町				高森町満蒙関係殉難 慰霊碑建設委員会	1981年	高森町下市田大丸山公園	「高森町満蒙関係殉難慰霊碑」

17	第九次羅國河大門村開拓団	分郷開	小泉郡大門村等／1940年	東安省勃利県三合村羅國河	615 (116)	268 (92)	大門連族会	1953年	小泉郡長門町大門小学校 東高台靖国社	「大門靖国霊社」
18	第九次万金山開拓団高社郷	分郷開	下高井郡／1940年	東安省宝清県万金山	708 (76)	120 (64)	満州開拓團殉難者下高井郡慰霊委員会	1951年 8月25日	中野市東山公園	満州開拓殉難慰霊塔
19	第九次奉倫河内郷開拓団	分郷開	下水内郡飯山町他／1940年	東安省宝清県奉倫河	607 (108)	196 (81)	慰霊碑建設委員会	1995年	飯山市大字飯山橋之平	「第九次奉倫河下水内郷開拓団慰霊之碑」
20	第九次東崇倫河道科郷開拓団	分郷開	更級郡／1940年	東安省宝清県尖山	471 (64)	62 (43)	更級満州開拓殉難塔建設委員会	1966年 4月18日	千曲市上山田町城山善光寺別院	更級満州開拓殉難慰霊塔
21	第九次密山千曲郷開拓団	分郷開	埴科郷／1941年	東安省宝清県東崇倫河	288 (59)	65 (48)	更級満州開拓殉難塔維持会	1994年 4月	千曲市上山田町城山善光寺別院	「更級満州開拓殉難慰霊碑」
22	第十次葉泉山黒姫郷開拓団	分郷開	南佐久郡北相木村他／1940年	東安省密山県黒山西砂崗	545 (47)	214 (31)	千曲郷同志会	1975年 6月29日	南佐久郡北相木村宮の平諏訪神社境内	「千曲郷開拓団戦争殉難者慰霊碑」
23	第十次李花屯小泉郷開拓団	分郷開	上水内北山部7カ村／1941年	北安省徳都県葉泉山	156 (20)	39 (13)	上水内北山部7カ村	1954年	信濃町柏原小丸山公園	「満州黒姫郷之碑」
24	第十次及竜泉第一次水曾郷開拓団	分郷開	小泉郡／1941年	浙江省延慶県李花屯	380 (54)	173 (42)	李花小泉会	1975年 3月22日	上田市別所温泉安楽寺境内	「李花小泉開拓団団物故者慰霊碑」
25	第十次珠山高井開拓団	分郷開	西筑摩郡山口村・神坂村・田立村／1941年	北安省徳都県及竜泉	111 (31)	45 (21)	山口村開拓団関係者	1972年 7月19日	西筑摩郡山口村役場前	「満洲開拓之碑」
26	第十一次水和三峯郷開拓団	分郷開	上高井郡／1942年	東安省宝清県頭道河子村頭道崗	197 (36)	91 (29)	満州珠山開拓慰霊碑建立委員会	1952年11月	須坂市臥竜公園	「満州珠山開拓慰霊碑」
27	第十一次苗地伊南郷開拓団	分郷開	上伊那郡／1942年	興安東省布特哈旗成吉思汗郷図克達西街勝子地区	289 (29)	152 (16)	元満州三峯郷開拓団永和会	1977年 9月	上伊那郡高遠町満光寺境内	「招魂碑」
28	第十一次第二水曾郷宝泉開拓団	分郷開	上伊那郡南部／1942年	興安東省阿榮旗苗地房子地区	258 (34)	146 (26)	伊南わらび会	1968年11月27日	駒ヶ根市中沢下常秀院山門前	満州開拓犠牲者慰霊塔
29	第十一次理郷河東筑摩開拓団	分郷開	西筑摩郡木祖・日義・奈川村／1942年	北安省徳都県西和村馬子良屯	490 (81)	245 (57)	木祖村 宝泉開拓団記念事業実行委員会	1947年 8月 1974年12月	木祖村数原本祖村民センター 木祖村数原本祖村民センター	宝泉水曾郷殉難者供養塔 「拓魂 宝泉開拓団記念碑」
30	第十一次理郷河東筑摩開拓団	分郷開	東筑摩郡／1942年	三江省通河県樺樹村瑪郷河屯	361 (74)	154 (55)	東筑郷拓友会	1983年10月30日	塩尻市市営東山霊園	「殉難碑」
31	第十三次北哈嗎阿智郷開拓団	分郷開 試験移民	下伊那郡阿智村	東滿総省宝清県北哈嗎郷河屯	190 (15)	57 (10)	旧西部地区8カ村民、同地区中国引揚者、進族関係者、日中友好協会長野県阿智支部	不明	阿智村駒場長岳寺境内	「日中友好不再戦の碑」
32	第十次歙喜嶺佐久郷開拓団	集合開	下伊那郡清内路村	東安省鶴寧県哈達河	197 (14)	33 (11)	清内路村	1979年	阿智村駒場長岳寺境内	満州哈達河供養地蔵尊
			南佐久郡12カ村／1941年	浙江省木蘭県歙喜嶺	527 (87)	207 (69)	清内路村 送出関係町村・団員	1975年 5月30日 1951年10月 5日	下伊那郡清内路村清内路諏訪神社境内 佐久市原成田境内	「満州開拓殉難之碑」 満州佐久郷開拓団団物故者霊塔

33		上伊那郡南向村						南向村（現中川村）	1954年11月3日	上伊那郡中川村大草「望岳荘」東側	「満蒙開拓殉難慰霊碑」
34		伊那市						上伊那町村会、伊那市、駒ヶ根市、満蒙開拓青少年義勇軍遺族会	1961年4月	伊那市伊那郡伊那公園内招魂社境内	少年の塔
35		上郷村						満蒙開拓記念碑建立委員会	1971年11月3日	飯田市上郷八王寺公園姫宮神社境内	「満蒙開拓之碑」
36		喬木村						喬木村満蒙開拓殉難者慰霊碑建設委員会	1982年4月	喬木村阿島八幡社境内	「喬木村満蒙開拓殉難者慰霊碑」
37	第一次八洲義勇隊開拓団	長野県・高知県／1938年	北安省嫩江県伊拉哈村八洲	289 (282)	226 (223)	八洲会			1970年8月16日	塩尻市善知島峠	「八洲魂」
38	第二次国義義勇隊開拓団	長野県全域／1939年	三江市樺川県田録村六推峯	307 (229)	232 (202)	国義拓友会			1973年4月	松本市護国神社境内	「拓友之碑」
39	第二次昭義義勇隊開拓団	長野県・岐阜県／1939年	北安省通北県鶏走河	215 (199)	170 (156)	昭会			不明	伊那市伊那公園招魂社境内	「満蒙開拓青少年義勇軍招魂碑」
40	第三次柏葉義勇隊開拓団	東信北信／1940年	東安省虎林県田山子	298 (288)	270 (262)	柏葉会			1969年9月	軽井沢町	「拓魂」
41	第三次鳳鳴義勇隊開拓団	南信中信・上水内郡／1940年	三江市龍北県翔村鳳鳴	293 (243)	234 (193)	鳳鳴同志会			1966年1月23日	諏訪市貞松院境内	満州開拓鳳鳴義勇隊供養塔
42	第四次北尖山北信義義勇隊開拓団	北信／1941年	東安省宝清県北尖山	250 (224)	215 (195)	北信拓友会			1963年9月	長野市城山長野清泉女学院高校北隣	「北信拓友会記念碑」
43	第四次東海浪瑞原義勇隊開拓団	長野県下／1941年	牡丹江省寧安県旧街村	218 (177)	170 (143)	龍川会			1971年10月17日	伊那市伊那公園内招魂社境内	「吾等の魂を永遠に此処に刻む」
44	第五次八洲義勇隊開拓団	長野県下／1941年	東満総省寧安県海濱村	220 (142)	174 (112)	瑞原会			1971年9月26日	北佐久郡軽井沢町泉酒寺境内	「牡丹地蔵」
45	第七次興安義勇隊開拓団	長野県下／1942年	黒河省嫩江県伊拉哈村八洲	256 (137)	233 (128)	八洲会			1967年5月7日	長野市善光寺雲上殿境内	「慰霊碑」
46	第七次興安義勇隊開拓団	長野県下／1944年	興安総省西科後旗察爾森	209 (1)	98 (1)	満蒙開拓青少年義勇隊斉藤中隊			1976年11月	松本市 長野県護国神社境内	「拓友之碑」
47	第七次三三義勇隊開拓団	長野県下／	三江市清原県老連	278 (3)	200 (3)	三江会			1976年3月	諏訪市温泉寺境内	「少年義勇隊之碑」
48						三江会生存者一同			1979年11月	飯田市大宮神社境内	「わかい拓友の碑」
49						長野県開拓自興会			1974年11月	長野市善光寺境内	「拓魂碑」
50						財団法人全国強制抑留者協会長野県支部慰霊碑建立委員会			1998年9月27日	伊那市伊那春日公園内	「シベリア強制抑留者慰霊之碑」
						長野県中国人俘虜殉難者慰霊実行委員会			1964年4月	下伊那郡天龍村	「在日中国殉難烈士永垂不朽」

*「長野県満州開拓史 各団編」（長野県満州開拓拓史刊行会 一九八四）、「長野県満州開拓拓史刊行会 一九八四」の種別をあらわす。表1と同様、「長野県満州開拓拓史刊行会 一九八四」の種別にしたがっている。表内表記は略称であり、それぞれ、試験移民・試験（武装）移民団、自由移民：自由移民と分散・自警移民団、全県開：全県編成開拓団、分村開：分村移民開拓団、分郷開：分郷開拓団、集合・農工・帰農開拓団、全国義勇：全国混合編成による義勇開拓団、長野義勇：長野県単独義勇隊開拓団、訓練義勇：訓練道上的義勇隊と義勇軍、に対応する。